

平成 26 年度

とうきゅう環境財団
社会貢献学術賞贈呈式

第 6 回

日時：平成 26 年 11 月 12 日（水）

会場：セルリアンタワー東急ホテル

公益財団法人とうきゅう環境財団

TOKYU FOUNDATION for BETTER ENVIRONMENT

ご 挨拶

平成 26 年度第 6 回「とうきゅう環境財団社会貢献学術賞」贈呈式の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

当財団は、地域社会への感謝の気持ちから、主要事業エリアを流れる多摩川およびその流域の環境改善を図ることを目的に昭和 49 年 8 月 28 日に設立され、平成 21 年 8 月、設立 35 周年記念事業として我が国の学術振興に資することを目的に「社会貢献学術賞」贈呈事業を新たに開始いたしました。

本賞は、財団が研究助成の応募先として依頼しております環境に関連する学会、協会 82 ヶ所に候補者の推薦をお願いし、日本の環境分野（環境保全、環境科学、環境技術など）において学術的、社会的に特に顕著な業績（調査、研究、環境科学技術の発展、行政施策への推進、実践活動など）を挙げた個人、共同、団体などの研究者を顕彰いたします。

ご推薦にあたり関係各位のご理解とご協力に厚く御礼を申し上げます。

この度は、ご推薦頂いた候補者の中より高橋選考委員長はじめ各委員の厳正な審査のもと、日本地球惑星科学連合様よりご推薦の筑波大学名誉教授 吉野 正敏様が受賞されました。

吉野様は、我が国における、気候学、特にその歴史的研究や気候影響に関する調査研究の第一人者であり、近年は地球温暖化等の地球環境問題についても気候学の分野から指導的立場で研究を進められており、国際的にも高く評価されております。またその成果は農業や健康・疾病などにも広がりを見せ、社会的な貢献はまさに地球規模と言えます。このように気候学の発展と環境問題の解決にむけた各種研究のリーダーとして高く評価される吉野様に、この第 6 回社会貢献学術賞を贈呈することは、当財団にとりましても大きな喜びであります。誠におめでとうございます。

環境については、地球規模で極めて重要な問題を抱えております。地球温暖化の加速をはじめ自然環境破壊、エネルギー、生物多様性、廃棄物等、様々な分野で問題が表面化しつつありますが、それらを改善し解決していく力は人類の英知と実行力にかかっております。当財団もそのフィールドである多摩川という身近な自然に真摯に向き合っていくことがいずれ地球規模の問題解決の一助に結びつくものと考えております。

今後とも微力ながら環境を通じて社会に貢献すべく努力していく所存です。本日、贈呈式にご臨席をいただきました皆様には変わらぬご指導、ご支援をお願い申し上げます。財団を代表いたしましてご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

公益財団法人とうきゅう環境財団
理事長 西本定保

「第6回とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」 贈呈式

- 1 日 時 平成26年11月12日(水)
- 2 場 所 セルリアンタワー東急ホテル
39階 タワーズサロン「セレステ」

3 式 次 第

・贈 呈 式 「セレステ」午後2時～3時

開 会

- (1) 挨拶 理 事 長 西本 定保
- (2) 社会貢献学術賞授与 理 事 長 西本 定保
- (3) 祝 辞 選考委員長 高橋 裕
- (4) 祝 辞 中村 正人様
日本地球惑星科学連合 副会長
宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所教授
- (5) 受賞者ご挨拶と講演 吉野 正敏様
筑波大学 名誉教授

・懇 親 会 「ソレール」午後3時～4時

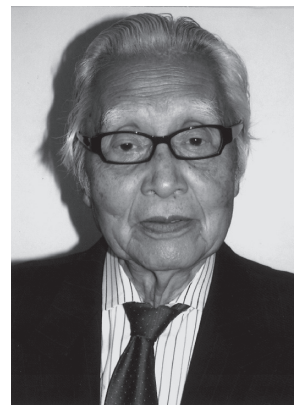
- (1) 乾 杯 田畑 貞寿様
当財団選考委員

☆会食・懇談☆

閉 会

「とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」

受賞にあたり



筑波大学 名誉教授
吉野正敏

感謝の言葉

このたび「とうきゅう環境財団社会貢献学術賞」を授与され、感謝にたえません。ありがとうございました。この財団が約40年も以前から環境問題に関わり、調査・研究に努力され、また研究者・行政担当者を育成しておられることに、深い敬意の念をかねてから抱いておりました。今般、日本地球惑星科学連合の推薦により、その環境財団から「社会貢献学術賞」をいただくことはこの上ない喜びであり、光栄でございます。審査をしていただいた審査委員会の委員長高橋裕先生および委員の皆様にご心から感謝いたします。

以下、私の研究の領域、略歴、研究体制の確立、業績などについてまとめました。

1. 研究の領域

1.1 気候学

局地気候学または小気候学と呼ばれる地域スケールの気候現象の調査・研究に学生時代以来、最も力をそそいだ。その最初の成果は「小気候」(1961)で、その後、改訂版(1987b)をだした。英語版は「Climate in a small area」(1975)である。

次いで、日本全国の気候、特に気候地域区分(1980c,d、1981a)、風の特性記述(1952、1955、1957、1958a,b、1980a、1981b、1984b、2008a)、梅雨期間の4段階の解明(1963a、1965、1966b)、などの地域スケールの研究を行った。さらに、東アジアにおける前線帯・収束帯(1969)、その動きと関連するモンスーンアジアの雨季・乾季を解明した(1971a)。また、日本を中心にした東アジアの天気図型の分類を行い、各型の季節変化・年年変動に関する研究を行った(1977a)。現地研究としては、旧ユーゴスラビア(1971b、1976a)・スリランカ(1983a)・インドネシア(ジャワ島)(2000b、2001a)・タイ(2000a,c)、中国の海南島および雲南(1986a、1989b、1990a)、タクラマカン沙漠(2002a)などにおける局地気候・環境と、農業・人間生活との関係の解明を国際共同研究の代表者として実施した。

先史時代・歴史時代における気候と人間生活との関係、すなわち、歴史気候学の研究を行い著書を刊行した(1979a、1995、2006a、2011)。一般科学史の1分野としての「気候学の歴史」をまとめた(2007a)。これは世界における気候学研究の発達史を邦文でまとめたわが国で最初のものである。

1.2 環境科学

1980年代後半に入り気候が温暖化する傾向が顕在化し、世界の気候学者が関心をもち、世界気象機構(WMO)その他の国際機関が協力してその解明にあたるようになった。1990年の世界気候会議の準備委員会の委員として、特にその第2ワーキンググループ(人間社会の適応と対策)の委員として、温暖化に関わる世界の環境科学の全領域の問題を把握した(1991a)。また、国内では日本学術会議の「地球環境に関する特別委員会」の委員長として、2期にわたり、日本学術会議における全分野(当時の第

1 部から第 7 部まで) における地球環境に関する諸問題について研究した (1994b)。

個人的には、上記の国際共同研究の代表者として、それぞれの地域における人間生活・人間社会・諸産業と気候環境の問題 (2000a) を扱った。また、植物の成育形態、特に、風による偏形樹 (1973) について研究した。気候地名の収録・分類・解説を総括した (1997b、2001b)。黄砂発生とタクラマカン沙漠における農民の生活を文献・現地研究でまとめた (2002a)。気候環境学 (1979a) あるいは環境気候学というタイトルで、環境科学と気候学にまたがる分野を総括した。健康と気候 (2004)、あるいは医学気象の問題に対処するバイオクリマ研究会を立ち上げ、発展させた。新しい課題として、東日本大震災の津波被害と気候環境被害の複合災害について、考察した (2013b,c,2014)。[括弧内はそれぞれの研究領域の代表的成果で、後記する著作・文献の刊行年を示す]

2. 略歴

2.1 学歴

東京文理科大学地学科地理学専攻修了 (1953 年)、理学博士 (1961 年)、ドイツ、ボン大学、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学生 (1961-1963 年)。

2.2 職歴

東京教育大学助手、理学部 (1953-1967 年)、法政大学文学部助教授 (地理学) (1967-1969 年)、同教授 (1969-1974 年)、筑波大学教授 (地球科学系) (1974 年)、同定年退官・名誉教授 (1991 年)、愛知大学特任教授 (1991-1998 年)、ドイツ・ハイデルベルク大学客員教授 (南アジア研究所) (1967-1968 年)、国連大学上席学術顧問 (2001-2010 年)

2.3 学協会等会員歴

日本地理学会・日本沙漠学会の元会長・名誉会員、日本気象学会・日本生気象学会の名誉会員、国際地理学連合 (IGU) の元副会長、日本学術会議会員第 14 期・第 15 期会員、ルーマニア・アカデミー外国会員。

2.4 受賞歴

日本気象学会藤原賞 (1977 年)

インド農業気象学会賞 (1991 年)

ドイツ、アレキサンダー・フォン・フンボルト研究賞 (1992 年)

国際地理学連合 (IGU) 栄誉賞 (2000 年)

日本農業工学会フェロー推挙 (2005 年)

ルーマニア地理学会賞 (2006 年)

国際都市気候学会リューク・ハウオード賞 (2007 年)

3. 研究体制の確立

3.1 IPCC の立ち上げ

1980 年代・1990 年代・に ICSU, UNEP の気候変動・地球環境に関する多数の委員会の委員として参画し、気候学研究者の立場から、また、日本およびアジアからの委員の立場から、1990 年代以降の研究体制の確立に貢献した。特に 1990 年にジュネーブで開催された第 2 回世界気候会議の準備委員会委員として数年にわたって活動し、成功させた。この会議で IPCC (気候変動に関する政府間パネル, Intergovernmental Panel on Climate Change) が動きだした。その第 1 次報告書の構成・編集責任者・執筆者等の成案決定に関わった。1991 年この世界気候会議の結果の具体的進展などを話し合ういわゆ

る Follow-up Meeting を日本（会場は筑波大学）で開催し、国際的な研究・議論・応用・対策の課題を日本の研究者ばかりでなく、一般社会に理解してもらうことに努めた。そして地球温暖化問題の重要性をアピールした。

IPCC はその後発展を続け、国際的に高い評価をえた。その結果、2007 年ノーベル平和賞が IPCC に贈られた。吉野はそれに協力した理由により、IPCC の Chairman である R. K. Pachauri と IPCC の Secretary である R. Christ 連名による賞状を授与された。

3.2 IGBP 国内委員会

国際地球圏 - 生物圏プログラム (IGBP、International Geosphere-Biosphere Programme) は 1987 年に ICSU によって発足した。日本はそのメンバー国の一つとして国内委員会を日本学術会議の中に設けた。吉野は日本学術会議の地理学研究連絡委員会委員および委員長として、長期間にわたり貢献した。特に、第 14 期・第 15 期は学術会議会員を務め、「地球環境に関する特別委員会」委員長として、IGBP への参画・実施を日本学術会議が政府に提出する勧告案をまとめた。そうして IGBP 国内委員会の委員長の責務を果たした。日本と世界各国との研究成果や研究者の交換・討論、共同研究の促進をはかった。

3.3 気候学・環境問題に関する貢献

別項の研究成果で記述した英文著書“Climate in a small area (1975)” はアメリカ合衆国・ヨーロッパ諸国（特にドイツ・スイス・オーストリア・英国・ポルトガル・ポーランド・ハンガリー・ルーマニア・旧ユーゴスラビアなど）の学会誌に書評で紹介され、高く評価された。欧米の大学における「局地気候学・小気候学」の教科書としても使用されている。また、気候学の一般教科書の中で、“さらに深く勉強するための必読書”にあがっている。日本気象学会の藤原賞受賞（1977 年）の対象にもなった。最近ではすでに絶版となっていて、入手困難である。そのためと思われるが、特に発展途上国の研究者から多く、入手方法の問い合わせがまだにある。中国語訳も刊行されている（1989a）。この著作は別項で記述した国外・国内の学会賞の主たる対象である。

国際的研究組織の確立に関しては、IGU のワーキンググループ「熱帯集落の気候学」の委員長、および、コミッション「気候学委員会」委員長として、この分野の世界各国の研究者の連繋・共同研究・シンポジウム開催などに務めた。国内的には「気候影響・利用研究会」を立ち上げ、現在約 20 年の歴史をもち、その持続的発展を成功させた。ニュースレターを刊行し、年 2 回、研究発表会を開催している。また、「バイオクリマ（生気候）研究会」を立ち上げ、健康・疾病と、天気・季節・気候との関係、また衣食住と気候との関係に関する調査・研究を推進した（2007b）。研究発表会・健康気象アドバイザー認定講座を毎年定期的にそれぞれ 1 回ずつ開催している。

“小気候（1961）”はその後改訂されて、“新版小気候（1987b）”となった。その二十数年間に約 7000 部刊行され、理学部の気候学・気象学・地理学・の教科書とされたばかりでなく、農学部・工学部でも教科書として使用された。新版も同様多数の分野で使用され、今日に至っている。

別項で記述したように、国外の多数の地域で現地調査・観測・研究を行ってきた。また、多数の外国人研究者・留学生・学位授与者を受け入れた。

地球温暖化が進行する中で、これに関わる人間生活、異常気象の発生などのエッセイ集（2013a）、歴史時代の気候と人間に関わる諸現象（2004、）、気候地名（1997b、2001b）など、歴史学・民俗学と気候学・環境科学をまたぐ現象の解明（2006a）について総括し、著書として数冊刊行した。イギリス・フランスなどではこれまでこの分野の書物が多数刊行されているが、日本においても一般社会人の関心を高める役割を果たした。この作業はバイオクリマ研究会のインターネットで連続エッセイとして隔週更新し、テーマを変えながら、すでに数年続いており、幅広い読者を集めている。

4. 業績

4.1 海外研究

1961-1962年にスイスのローヌ谷において風の局地性の調査を行なった。その結果(1964)は、オーストリアのインスブルック大学地理学科の学生の現地実習・研究において欠かせない文献の一つになっている。旧ユーゴスラビアにおいて局地風「ボラ」の観測・文献調査・植生分布・人間生活との関係など共同研究(文部省海外学術調査研究費による)を研究代表者として実施した。その成果(1976)はクロアチアのザグレブ大学の気候学教科書に引用されている。またイタリアのトリエステで刊行された「ボラ」という書物の内容は吉野の業績・成果・人物紹介が中心である。

1980年代初めにはスリランカで風・降水量の局地性とチャの栽培・コメの生産などとの関係を文部省海外学術調査研究費により実施した。その成果(1983a, 1984a)は、熱帯季節風地域における気候環境と人間活動の関係の解明に貢献した。今日になっても、その研究成果出版物の要求が現地から絶えない。また、この時、現地で若い共同研究者であった1人は、その後筑波大学で学位を取りオーストラリアの国立研究機関CSIROで研究者となった。

1980年代には中国海南島・雲南西双版纳において局地気候と土地利用・人間生活に関する地生態学の研究を文部省海外調査研究費により行なった。その成果(1986a, 1989b, 1990a)は英文で発表した。邦文では「熱帯中国」(1997a)にまとめた。この研究で中国地理学界と一層緊密な関係を構築した。中国からの多数の留学生の受け入れ、学位論文指導などもその一端である。

4.2 気候学・地球環境学

気候学に関しては上記の研究領域および研究体制の確立に述べたとうりである。1950年代、1960年代は狭い地域の気候、いわゆる小気候を研究し、なかでも風と地形にかんする業績をあげた。1970年代には対象地域をモンスーンアジア・地球規模に広げた。1980年代からは国際共同研究・国際地理学連合の気候委員会、などに関する刊行物が増えた(1987a, 1997c, 2000a)。1990年代からは著書による貢献が増え、2000年代になると論文より、単著の図書が増えた。歴史気候学関連の業績は1990年代後半から2000年代に増えた。

地球環境学に関しては1980年代以降、IGBP, IPCC関連の刊行物が増えた(1991a)。また、地球温暖化にともなう気候変化と変動、人間活動との関連に関する刊行物の比重が増した。

4.3 刊行物 [上記の文中にふれた主要な刊行物のリスト。年代順に、(4.3.1) (単著・共著)・編著書と、(4.3.2) 論文にわけて記述した]

4.3.1 著書(単著・共著)・編著(主要なものを抜粋した)

- 1961 小気候——局地気象学序説。地人書館、東京、274ページ。(単著)
- 1971a Water balance of Monsoon Asia, University of Tokyo Press, Tokyo, and University of Hawaii Press, Honolulu, 308 pages.(編著)
- 1971b ユーゴスラヴィアにおける局地風[ボラ]の気候地理学的研究(第1次報告)。法政大学文学部紀要、17、1-170。(編著)
- 1975 Climate in a small area. University of Tokyo Press, Tokyo, 549 pages(単著)
- 1976a Local wind Bora. University of Tokyo Press, Tokyo, 289 pages(編著)
- 1978a 気候学。大明堂、東京、350ページ。(単著)
- 1979a 気候環境学概論。東京大学出版会、東京、259ページ(福井英一郎と共編著)
- 1983a Climate, water and agriculture in Sri Lanka. Institute of Geoscience, University of Tsukuba, Tsukuba, 270 pages. (I. Kayane, C. M. Madduma Bandara と共編著)
- 1984a Climate and agricultural land use in Monsoon Asia.. University of Tokyo Press, Tokyo, 398

- pages. (編著)
- 1986a Climates, geoecology and agriculture in tropical China (I) . Climatological Notes, University of Tsukuba, 35, 244 pages. (編著)
- 1987a The climate of China and global climate. China Ocean Press, Beijing, and Springer-Verlag, Hong Kong, 441 pages. (Duzheng Ye, Congbin Fu, Jiping Chao と共編著)
- 1987b 新版「小気候」。地人書館、東京、298 ページ。(単著)
- 1988 日本における気候影響・利用の課題。気象研究ノート、(162)、1-231 (編著)
- 1989a 局地気候原理。広西科学技術人民出版社、南寧、329 ページ (単著、郭可展ほかによる 1975:Climate in a small area の中国語訳)
- 1989b Climates, geoecology and agriculture in tropical China (II) . Climatological Notes, University of Tsukuba, 38, 304 pages. (編著)
- 1990a Climates, geoecology and agriculture in tropical China (III) . University of Tsukuba, 96 pages. (編著)
- 1991a The global environment. Springer Verlag, Berlin and Heidelberg, 257 pages (K. Takeuchi と共編著)
- 1994a 雲南フィールドノート。古今書院、東京、244 ページ (編著)
- 1994b 地球環境への提言——問題の解決に向けて。山海堂、東京、231 ページ (編著)
- 1995 歴史と気候、講座「文明と環境」第6巻、朝倉書店、東京、244 ページ。(安田喜憲と共編著)
- 1997a 熱帯中国：自然そして人間。古今書院、東京、388 ページ。(編著)
- 1997b 気候地名をさぐる。学生社、東京、235 ページ。(単著)
- 1997c Climates and societies—A climatological perspective. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, the Netherlands, 406 pages (M. Domros, A. Douguedroit, J. Paszynski, L. Nkemdirim と共編著)
- 1999 風と人びと。東京大学出版会、東京、220 ページ。(単著)
- 2000a Rice production in Monsoon Asia. Global Environmental Research, 3 (2) , 69-197 (Special Issue, 編著)
- 2001a 特集：環境変動とアジアの稲作。地球環境、6 (2)、131-266. (編著)、
- 2001b 気候地名集成。古今書院、東京、284 ページ。(単著)
- 2002a 特集：黄砂。地球環境、7 (2)、135-254. (編著)
- 2002b 中国的沙漠化。(中国語)。中国科学技術出版社、北京、254 ページ (単著、陳継平ほか訳)
- 2002c 環境気候学。東京大学出版会、東京、392 ページ。(福岡義隆と共編著)
- 2004 気候風土に学ぶ——暮らしと健康の歳時記。学生社、東京、227 ページ。(バイオクリマ研究会編、編著)
- 2005a 千葉県自然誌、本編 8: 変わりゆく千葉県の自然・県史シリーズ 48。千葉県史料研究財団、千葉、814 ページ (編著)
- 2005b 千葉県自然誌、別編 1: 千葉県地学写真集、県史シリーズ 48。千葉県史料研究財団、千葉、454 ページ (編著)
- 2006a 歴史に気候を読む。学生社、東京。197 ページ。(単著)
- 2007a 気候学の歴史。古今書院、東京、437 ページ。(単著)
- 2007b Weather forecasting for health and society. Global Environmental Research, 11 (1) , 1-82. (Special Issue, 編著)
- 2008a 世界の風・日本の風。成山堂書店、東京、140 ページ。(単著)
- 2010a 地球温暖化時代の異常気象。成山堂書店、東京、201 ページ。(単著)
- 2011 古代日本の気候と人びと。学生社、東京、198 ページ。(単著)
- 2013a 極端化する気候と生活。古今書院、東京、216 ページ。(単著)

4.3.2 論文 (主要なものを抜粋)

- 1952 風向に及ぼす地形の影響。地理学評論、25 (3)、100-110.
- 1955 東京都区内の風向分布。天気、2 (8)、203-207.
- 1957 The structure of surface winds crossing over a small valley. Jour. Met. Soc., Japan, 35 (3) , 184-195.
- 1958 Some aspects on the distribution of the surface winds within a small area. Jour. Met. Soc., Japan, 75th Ann. Volume, 365-371.
- 1958 Wind speed profiles of the lowest air layer under influences of micro-topography. Jour. Met. Soc. Japan, 36 (5) , 174-186.
- 1960 日本における雨量最大観測値・雨量一時間曲線・雨量強度一時間曲線の特性とその分布。気象集誌、38 (1)、27-46.
- 1963a Rainfall, frontal zones and jet streams in early summer over East Asia. Bonner Meteorologische Abhandlungen, (3) , 1-127.
- 1963b Lokalklima und Vegetation im Kirishima Gebirge im sudlichen Kyushu, Japan. Erdkunde, 17、149-160. (with M. T. Yoshino)
- 1964 Some local characteristics of the winds as revealed by wind shaped trees in the Rhone valley in Switzerland. Erdkunde, 18, 28-39.
- 1965 Four stages of the rainy season in early summer over East Asia (Part 1) . Jour. Met. Soc., Japan, 43 (5) , 231-245.
- 1966a (ibid) (Part 2) . Jour. Met. Soc., Japan, 44 (4) , 209-217.
- 1966b Wind-shaped trees as indicators of micro- and local wind situation Proc. 3rd International Biometeorological Congr., Pergamon Press, Oxford, 994-1005.
- 1967a Atmospheric circulation over Northwest Pacific in summer. Meteorologische Rundschau, 20 (2) , 45-52.
- 1967b 昭和時代の日本における探検と海外調査の歴史。東京教育大学地理学研究報告、(11)、159-178.
- 1968a 日本の風土の認識。日本科学技術史体系 11、自然。第一法規、東京、329-356.
- 1968b Geographische Untersuchungen japanischer Forscher in suedasiatischen Raum seit der Meiji-Restauration. Jahrbuch des Suedasien-Institut der Universitaet Heidelberg, (2) , 52-69.
- 1969 Climatological studies on the polar frontal zones and the intertropical convergence zones over South, Southeast, and East Asia. Climatological Notes, (1) , 1-71.
- 1970 Oroshi, ein starker Lokalwind in der Kanto-Ebene, Japan. Colloquim Geographicum, (12) , 43-57.
- 1973 Studies on wind-shaped trees: Their classification, distribution and significance as a climatic factor. Climatological Notes, (12) , 1-52.
- 1974a Agricultural climatology in Japan. In: Agricultural Meteorology in Japan, ed. by Y. Mihara, University of Tokyo Press, Tokyo、11-40.
- 1974b Morphology of the topography at the 50mb-level in the northern hemisphere. Bonner Meteorologische Abhandlungen, 17, 239-251.
- 1974c Pressure pattern calendar of East Asia, 1941-1970, and its climatological summary. Climatological Notes, (16) , 1-71. (with Keiko Kai)
- 1976b フェーンとボラとおろし。科学、46 (8)、500-506。
- 1977a 日本の季節区分と各季節の特徴。地理学評論、50 (11)、635-651.

- 1977b 局地気候学・局地気象学の体系化の諸問題。天気、24 (12)、731-737.
- 1978b Climatic change and fluctuation in South and Southeast Asia. Climatological Notes, (21) , 1-48. (with K. Urushibara)
- 1979b Winter and summer monsoons and the navigation in East Asia in historical age. GeoJournal, 3 (2) , 161-169.
- 1980a 局地気候的にみた冷気流。災害の研究、(11)、124-135.
- 1980b 筑波の環境研究——その反省と展望。筑波の環境研究、(5c)、80-84.
- 1980c Natural regions of Japan. GeoJournal, 4 (2) , 161-172.
- 1980d The climatic regions of Japan. Erdkunde, 34 (2) , 81-87.
- 1981a Regionality of climatic change in East Asia. GeoJournal, 5 (2) , 123-132. (with K. Urushibara)
- 1981b Orographically induced atmospheric circulations. Progress in Physical Geography, 5 (1) , 76-98.
- 1983b 世界と日本の古気候。気象研究ノート、(147)、569-585.
- 1983c 生物のレベル・人間生活への時間・空間スケールとそれに対応する気候のスケールについて。現代・生態学の断面、共立出版、東京、16-23.
- 1984b Thermal belt and cold air drainage on the mountain slope and cold air lakes in the basin at quiet, clear night. GeoJournal, 8 (3) , 230-250.
- 1986b Climatic change and ancient civilization. In: The Encyclopedia of Climatology, ed. by J. E. Oliver and R. W. Fairbridge, Van Nostrand Reinhold Book Co., New York, 207-212.
- 1986c Local climatology. In: (ibid) , 551-558.
- 1987c 関東甲信地域の降ひょうとひょう害、その分布とその時の大気構造。農業気象、43 (3)、239-246.
- 1989c Problems in climates and agroclimates for mountain developments in Xishuangbanna, South Yunnan, China. Geographical Review of Japan, 62B, (2) 149-160.
- 1990b 世界と日本の都市気候の変遷と都市気候学の発達。日本生気象学会誌、27 (2)、45-56.
- 1990c Impact of climatic change on agriculture and forestry: A review on the World Climate Impact Studies Programme in East Asia. Jour. Agricultural Meteorology, Japan, 46 (3) , 153-165.
- 1991b Zhe Kezhen and world climatology. Ann. Rep.Inst. Geoscience, Univ. Tsukuba, (16) ,20^25.
- 1991c Development of urban climatology and problems today. Energy and Building, 15/16,, 1-10.
- 1992a フェーン型とボラ型の局地風に関する気候学的・気象学的・地理学的研究。地理学評論、65A, 1-16.
- 1992b 新疆の沙漠地域の風と雨。沙漠研究、1、1-16.
- 1993 Climatic change and agricultural production in Japan over the last 100 years. Jour. Agricultural Met., Japan, 48 (5) , 509-516.
- 1997a Palaeoenvironmental change in Java island and its surrounding areas. Jour. Quaternary Sci., John Wiley & Sons 12 (5) , 435-442. (with K. Urushibara-Yoshino)
- 1998a タクラマカン沙漠の自然と人間生活。沙漠研究、8 (2) , 85-94.
- 1998b Temperate Asia. In: The Regional Impacts of Climatic Change Published for IPCC) , Cambridge Univ. Press, 355-379 .
- 2000b Agricultural production and climatic change in Indonesia. Gobal Environmental Research, 3 (2) , 187-197. (with K. Urushibara-Yoshino and W. Suratman)
- 2000c Rice Production in Thailand and in Monsoon Asia. Symposium at Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, 12-14 Sept., 2000, 132-158.

- 2000d Problems in climatology of dust storm and its relation to human activities in Northwest China. *Jour. Arid Land Studies*, 10 (3) , 171-181.
- 2002d Secular variation of sand-dust storm and blown sand occurrence in the Taklimakan Desert, NW China. *Jout. Arid Land Studies*, 11 (4) , 253-258.
- 2003 生気候による日本の地域区分。地球環境、8 (2)、121-135.
- 2006b Global warming and mountain development. *Global Environmental Research*, 10 (1) , 3-12.
- 2006c Studies on bioclimatea and weather-health forecasting in Japan. *Global Environmental Research*, 11 (1) , 23-31. (with R. Miyashita)
- 2007c 歴史時代の気候変動に関する研究の展望。地学雑誌、116、836-850。
- 2008b Ecotourism and climate in Yunnnann, South China. *Global Environmental Research*, 12 (2) , 101-108.
- 2009a Development of bioclimatological thought in Japan from ancient times to present, *Global Environmental Research*, 13 (1) , 5-12.
- 2009b 4~10 世紀における気候変動と人間活動。地学雑誌、18 (6)、1221-1236.
- 2010b Local convergence zones or discontinuous lines in the Taklimakan Deset, NorthwestChina. *Jour. Arid Land*, 2 (2) , 77-86. (with T. Ishiyama and J. Suzuki)
- 2013b 地球環境問題としての津波災害について。地球環境、18 (1)、3-12.
- 2013c 東にっぽん大震災における津波による人的被害。地球環境、18 (1)、13-22.
- 2014 Impact of Tsunamis on human life and society. *Global Environmental Research*, 18 (1), 3-8

推薦の言葉



公益社団法人日本地球惑星科学連合 会長
津田 敏隆

吉野先生、おめでとうございます

今回公益社団法人日本地球惑星科学連合から吉野正敏先生を貴財団社会貢献学術賞に推薦させて頂きました。本連合は地球惑星科学およびその関連分野にかかわる研究者、学生、技術者、教育関係者、科学コミュニケーター、一般市民からなる約9,000名の個人会員と地球惑星科学関連の50学協会を団体会員とする学術団体であります。地球物理学、地質学、鉱物学、地理学等に関する学会を網羅する、世界でも類を見ない総合的な連合組織として、我国における地球惑星科学コミュニティの相互理解、意見集約や合意形成をはかると同時に、対外的な窓口組織として国や一般社会に対して提言や情報発信を行っておりますが、この中で地球環境保全への取り組みは連合の重要な活動の一つであり、推薦させて頂いた吉野先生が社会貢献学術賞を贈られることは大変喜ばしいことです。

吉野正敏先生は1980年代・1990年代国際科学会議（ICSU）、国連環境計画（UNEP）の気候変動・地球環境に関する多数の委員会に委員として参画し、気候学研究者の立場から、また、日本・およびアジアからの委員の立場から、1990年代以降の研究体制の確立に貢献されました。特に1990年にジュネーブで開催された世界気候会議の準備委員会の委員として数年にわたって活動しこの会を成功に導いておられます。この会議で大変重要な地球変動に関する国際政府間パネル IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change）が発足しました。吉野先生はその第1次報告書の構成・編集責任者・執筆者等の成案決定などに関わられました。1991年この世界気候会議の結果の具体的進展などを話し合う Follow-up Meeting を筑波大学で開催され、国際的な研究・議論・応用の課題を日本の研究者ばかりでなく一般社会に理解してもらうことに尽力され、地球温暖化の問題の重要性をアピールされました。

国内では日本学術会議で地理学研連の委員または委員長として長期間にわたり貢献され第14期・15期の会員を務められました。この時“地球環境に関する特別委員会”の委員長として、国際科学会議と国内環境問題研究組織との連絡・調整を取りまとめておられます。特に「地球圏・生物圏に関する国際プログラム（IGBP, International Geosphere Biosphere Program）」への参画・実施を政府に勧告され、「日本IGBP委員会」の委員長を務め、地球環境に関する研究とその適用・応用の諸問題の解明に力を注がれました。また、それぞれの分野における日本と世界各国との研究成果や研究者の交換・討論、共同研究の促進をはかられました。

教育の分野では著書“Climate in a small area（1975）”は、アメリカ合衆国・ヨーロッパの多数国（特にドイツ・スイス・ポルトガル・ポーランド・ハンガリー・ルーマニア）で大学の「局地気候学・小気候学」の教科書として使用され、刊行されている気候学一般教科書の中で、“さらに深く勉強するための必読書”に指定しているものも多くあります。また先生の著書“小気候（1961）”は二十数年間に約7,000部刊行され、理学部の気候学・気象学・地理学の教科書とされたばかりでなく、農学部・工学部

でも教科書として使用され、改訂された“新版小気候（1987）”は今日でも使用されています。また国外多数の地域で現地調査・観測・研究を行っておられますが、その結果は英語・ドイツ語で発表されて、現地の研究者の重要文献になっています。例えば、スイスのローヌ溪谷の風の局地性の研究結果はオーストリアのインスブルック地理学科学士の現地研究には必携の文献の一つです。旧ユーゴスラビアのクロアチア海岸の風の局地分布はザグレブ大学の教科書に引用されています。イタリアのトリエステで刊行された局地風“ボラ”の本の中心は吉野先生の業績・人物紹介であります。これらはみな、吉野先生の教育研究面における貢献の具体例であります。

かくのごとく優れた吉野先生が今回社会貢献学術賞を受けられることは私どもの喜びとするところであります。本当におめでとうございました。

選考委員会メンバー紹介



選考委員長

高橋 裕

東京大学名誉教授
専攻 河川工学



奥山 文弥

東京海洋大学 客員教授
専攻 魚類学・環境教育



小堀 洋美

東京都市大学
環境情報学部教授 農学博士
専攻 保全生物学



小宮 輝之

上野動物園 元園長



齋藤 潮

東京工業大学大学院
社会理工学研究科 教授
専攻 景観原論 計画・設計論



新藤 静夫

千葉大学
名誉教授
専攻 地質学・鉱物学



鈴木 信夫

昭和女子大学 客員教授
医学博士
専攻 環境影響生化学



田畑 貞寿

(公財)日本自然保護協会 顧問
専攻 造園学・環境計画学



土屋 十国

前橋工科大学 名誉教授
専攻 環境水理・河川工学



寺西 俊一

一橋大学大学院
経済学研究科 教授
専攻 経済学・環境経済学

▶ 役員・評議員 ◀

(敬称略 50 音順)

[理事長]	西本定保	東京急行電鉄株式会社 顧問
[理事]	池島政広	亜細亜大学 学長
	石渡恒夫	京浜急行電鉄株式会社 取締役会長
	植木正威	東急不動産ホールディングス株式会社 取締役会長
	大須賀頼彦	小田急電鉄株式会社 取締役会長
	加藤 奂	京王電鉄株式会社 取締役会長
	小長啓一	東京急行電鉄株式会社 取締役
	小沼通二	東京都市大学 名誉教授
	中村英夫	東京都市大学 名誉総長
	中村良夫	東京工業大学 名誉教授
	涌井史郎	東京都市大学 教授
[常務理事]	小野木喜博	当財団 事務局長
[監事]	岩田哲夫	東京急行電鉄株式会社 常勤監査役
[評議員]	井原國芳	東京急行電鉄株式会社 顧問
	海老原大樹	東京都市大学 名誉教授
	越村敏昭	東京急行電鉄株式会社 取締役会長
	佐々木謙二	横浜商工会議所 会頭
	鈴木 學	株式会社 日立製作所 技監
	高橋 裕	東京大学 名誉教授 / 選考委員長
	鳥井信吾	サントリーホールディングス株式会社 取締役副社長
	水田寛和	株式会社 東急百貨店 顧問
	山口裕啓	学校法人 五島育英会 理事
	山田長満	川崎商工会議所 会頭
	横溝英樹	株式会社 東芝 関東支社長(兼)総合営業部長

財団の概要	
<p>設立の趣旨</p> <p>財団法人とうきゅう環境浄化財団は、東京急行電鉄株式会社の創立 50 周年を記念して昭和 49 年 8 月に設立され、平成 22 年 10 月に公益財団法人とうきゅう環境財団となりました。</p> <p>東京急行電鉄株式会社は、大正 11 年、当時東京西南部の多摩川沿いや洗足等において文化住宅地の経営を行っていた会社から分離、創業されました。</p> <p>事業基盤が多摩川流域にあり、その地域社会への感謝の気持ちに基き、流域の環境改善を図りたいとの趣旨により、本財団は設立されたものです。</p>	<p>概 要</p> <p>設 立 昭和 49 年 8 月 28 日 公益財団法人移行日 平成 22 年 10 月 1 日</p> <p>行政府 内閣府</p> <p>基本財産 9 億 7 千 8 百万円 (平成 26 年 3 月現在)</p> <p>財 源 基本財産等の運用収入、 補助金、並びに寄付金</p>

公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル5F)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

ホームページ <http://www.tokyuenv.or.jp/>

